タップリほめる。シッカリしかる。

教育のページ

あったか給食 おいしいね

12/14

▲新しいごはん保温箱での配膳（臼石小）

村内の幼稚園、小・中学校で、新しいごはん保温箱を使った給食がスタートしました。

これは、子どもたちに、より温かなおいしい給食を味わってもらおうと、食育の一環として行なわれたものです。

今回、購入されたドイツ製の保温箱は、従来の米缶に比べ保温能力が高く、事前の温度調査では、2時間の温度低下は、わずか4度でした。

この日、臼石小学校でも、はじめての保温箱での給食配膳が行なわれ、一人ひとりに温かなごはんが盛り付けられました。

「今までよりごはんがあったかい」「これから寒くなるのであったかいごはんが食べられてうれしい」「前の米缶より少し重いけど使いやすい」など子どもたちにも好評でした。

また、村給食センターでは、地産地消による安心・安全な学校給食を進めようと、地元産の野菜や食材を積極的に使った給食を提供しています。

12月15日には、昨年収穫された「まめっ子畑」の大豆を使って、村内で手づくりされたみそが給食に登場しました。子どもたちは、おいしそうに給食をほお張っていました。

▲あったかごはんに笑顔（臼石小）

子育て相談室 － お気軽にご相談ください －

できる

教育相談の研修会で、「父親を語る」のを聴く機会がありました。一人の男性教員がわが父について語りました。

中学3年、受験する高校を決めるとき、「お前、これまで学校で何を勉強してきた?」と尋ねられたそうです。「国語や数学、それから体育もだな」と答えたら、「お前が本当にできることは何だ?」とまた質問されて、困ったということです。よくよく考えてみたら、国語も数学も、そして体育もみんな中途半端で、「できる」と胸を張って言えるできることは何もないことに気づいたからでした。

答えられないでまごまごしていたら、父親は「国語も数学も、体育もできることは大切だ。それはそれでえらい。他にも、母親の手伝いができる、人に親切にできる、困っている人を助けることができる、礼儀正しくできる、お金を稼ぐことができる、自分の行いを反省できる、こんなことも『できる』だ。高校に行ったら、どんなことでもいい、自分が誇りに思える『できる』を身につけよ」と、話したということでした。

それ以来、この教員は父親のこの言葉をいつも心に刻んで、人生の折々に「できる」ことを目指して努力してきたそうです。「それで願いが実現している」とも語っていました。

受験生を持つ飯舘村の親さんたちも、自分の信条を語って、わが子を励まされてはいかがかと思います。

飯舘中学校スクールカウンセラー　海野和夫

○「教育相談」は、飯舘中学校（☎42－0008）へ電話でお申込みください。

会話のコツは「笑顔」と「共感」

11/20

男女共同参画コミュニケーション講座

▲会話のコツを話す前田さん

生涯学習課では、男女共同参画の意識を若い世代にも広めようと、あい倶楽部（草野幼稚園ＰＴＡ有志）、福島県男女共生センターと連携した「コミュニケーション講座」を村公民館で開きました。

講師に前田 文さん（アズ・コミュニケーション代表）を迎え「尊重し合えるコミュニケーション～やさしい関係づくり～」と題した講座が行なわれました。

前田さんは「会話は相手の心に耳を傾けることがこつ。話を聞く姿勢や『非言語』である視線の高さやうなづき、相づちのタイミング、口調なども意識して会話を楽しんでほしい。相手に自分の話が伝わっていると思うと、信頼関係が生まれる」と話していました。

また、参加者約20人は、笑顔で相手の話を聞く練習や親子や夫婦の会話を模擬練習するロールプレイングを通して具体的なコミュニケーション方法を学びました。

▲お互いの話に耳を傾ける参加者

今日からチェンジ！ ～YOU（あなた ゆう）メッセージから I（私＊愛 あい）メッセージへ～

＊ＹＯＵメッセージは強い表現で、決めつけや評価、責めたてる感覚を相手に与えてしまいます。

「○○○、早く起きなさい」「○○○、だめでしょこぼしちゃ」「○○○、どうしてお母さんのいうことが聞けないの」など

➡

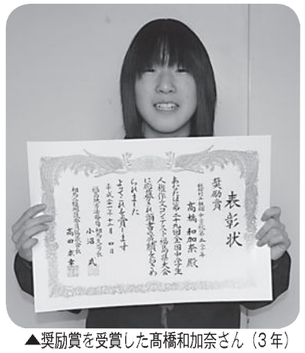
＊Ｉ（私：愛）メッセージは自分の感じたこと、考えたことが伝わるので、相手が受け取りやすくなります。

「私、あなたがとてもがんばっているように感じたわ」「あなたが手伝ってくれて、私うれしかった」など

人権への理解を深めよう

12/4

髙橋和加奈さんが中学生人権作文コンクール福島県大会で奨励賞を受賞



▲奨励賞を受賞した髙橋和加奈さん（3年）

「第29回全国中学生人権作文コンクール福島県大会」（福島地方法務局、県人権擁護委員連合会主催）において、飯舘中学校３年の髙橋和加奈さん（長泥）が奨励賞を受賞しました。

同コンクールは、次代を担う中学生が、日常の家庭や学校生活等の中で得た体験に基づく作文を書くことを通して、人権尊重、基本的人権についての理解を深め、豊かな人権感覚を身につけることを目的として毎年実施されています。

髙橋さんは「高齢者擬似体験を通して、祖父母が暮らす環境に、もっと優しさが必要と感じた」と高齢者に優しい環境の配慮について作文を書き上げ今回の受賞となりました。